

2012年度氷河情報センター分科会報告

雪氷研究大会（2012・福山）において、氷河情報センター設立40年記念ミニシンポジウムおよび総会を開催した。ミニシンポジウムでは、氷河情報センターの歴史の紹介、6月30日に富山市で開催されたシンポジウム「日本の多年性雪渓と氷河ーこれまでの研究と今後の展望ー」の報告があり、質疑応答が行われた。その後の総会では、活動・会計報告、活動方針・予算案の承認を行った。

日時：9月24日（月）13:00 - 15:00（総会14:30 - 15:00）

場所：福山市立大学（B会場）

ミニシンポジウム：

1. 氷河情報センターの歴史

上田豊氏（名古屋大学名誉教授）より、氷河情報センター設立の経緯とその後について紹介して頂いた。経緯は1960年代に国際水文学（ユネスコ）、特定研究（気候変化と氷河：ヒマラヤ研究班）を皮切りに、1971年3月に山岳情報センター設立を提案後、1973年5月に雪氷学会総会で氷河情報センターの設置が承認された。初期の運営委員長は樋口敬二氏（名古屋大学水圏科学研究所）である（「雪氷」35巻1号に記載）。設立直後からネパールの氷河を対象に調査が行われ、1973年10月にヒマラヤ山脈の氷河研究No.1に関する諸問題の内容（青本、BGRの前身）が刊行された。その後、関係者の不断の努力により成果が徐々に集まり、1988年頃からBGRは年に1巻刊行できるほどまでに成長している。

現在、中堅・若手研究者、学生等が氷河研究の最前線で活躍している。これからの日本の氷河研究が世代交代を迎えている昨今だからこそ、氷河情報センターの歴史を振り返り、中堅・若手研究者、学生等へ、氷河研究推進を後押しする趣旨がここにあった。

2. シンポジウム「日本の多年性雪渓と氷河ーこれまでの研究と今後の展望ー」報告

2-1. 飯田肇氏（立山カルデラ砂防博物館）より、立山連峰の氷体研究について紹介して頂いた。

立山にある雪渓は、1960年代から北海道大学、名古屋大学などが中心となって、先駆的研究から長期継続研究がおこなわれてきた。立山の内蔵助雪渓については、1979年に名古屋大学によって実施された調査によると、内蔵助雪渓では、氷体の流動は確認されなかった。御前沢、小窓、三ノ窓の3つの雪渓について、福井幸太郎氏（立山カルデラ砂防博物館）等は2009年に氷体の厚さ、表面流動速度を測定した。

小窓雪渓では、レーダー観測の結果、厚さ15～20mの積雪の下に、厚さ30m以上、長

さ900mの氷体が確認された。GPS観測の結果、1ヶ月で30cm以上の有意な流動が確認された。

三ノ窓雪渓では、15～25mの積雪下に日本最大級と思われる全長1200m、厚さ40m以上の巨大な氷体が確認された。GPS観測の結果、1ヶ月間観測で最大32cmの流動を確認した。

御前沢雪渓では、上流部で厚さ23m、長さ200mほどの氷体を確認した。50日間の流動量をGPSで観測したところ、最大10cmの流動を確認した。

以上の結果から、これら3つの雪渓は流動が観測されたので、福井氏等は「氷河」であると考え、「雪氷」74巻3号2012年5月に報告した。

2-2. 内藤望氏（広島工業大学）より、6月の公開シンポジウムにおける議論の結果を報告して頂いた。詳細は「雪氷」74巻5号に報告しているため、そちらを参照されたい。内藤氏の報告後、総合討論では、御前沢、小窓、三ノ窓雪渓を、今後「氷河」と呼ぶことに否定的な意見はなかった。

樋口敬二氏からは氷河の名前を地図に載せることについて提案があった。この件について澤柿教伸氏（北海道大学）より、地名については自治体（市町村）が決定し、自治体から国土地理院へ表記変更の要望があれば、国土地理院が検討するという流れになるとの説明があった。

総会：

1) 2011-12年度活動報告

1. 氷河情報センターニュースNo.34の編集・発行（「雪氷」74巻3号）
2. 氷河情報センターHPの更新
3. シンポジウム「日本の多年性雪渓と氷河-これまでの研究と今後の展望-」の開催
4. 分科会セッション（本シンポジウム）の企画・開催
5. 2011年度総会の実施

2) 2011年度会計報告

3) 2012-13年度活動計画の承認

1. 2013年度総会の実施
2. 氷河情報センターニュースの編集・発行
3. ミニシンポジウム（オーガナイズドセッション）の企画・開催
4. 氷河情報センターHPの更新

4) 2012年度予算案の承認

5) 役員改選：庶務幹事，広報幹事2名

6) その他

1. センター活動支援基金

2. 雪氷辞典の改訂

文責：

櫻井俊光（レーザー技術総合研究所）